

岡村昭彦没後 31 年を迎えて

映画「隣る人」上映会&トークイベント

刀川和也さん(映画監督) × 横山巖さん(弁護士)

第31回AKIHIKOの会開催



第31回AKIHIKOの会は、平成28年3月27日、映画『隣る人』上映会及び映画監督刀川和也さんと弁護士横山巖さんとのトークイベントという形で、ホテル新大阪コンファレンスセンターで開催されました。

開会に先立ち、これまでもAKIHIKOの会で演奏していただいたことのあるハープ奏者池田千鶴子さんによるサウルハープ演奏があり、国連での活動の報告などもあつて、音楽の持つ素晴らしさを感じるひとときを過ごしました。

続いて開会の挨拶を兼ね世話人の比留間洋一さんから岡村昭彦の長女で函館在住の佐藤純子さんからのメッセージ紹介がありました。

いよいよ、映画『隣る人』の上映会に入りました。刀川和也監督渾身のドキュメンタリー映画の90分がアツという間に過ぎたという感じでした。映画は児童養護施設での子ども達と職員との日ごろの交

流を軸に展開。「人と人との繋がりとは何か」「家族とは何か」「人として生きるとはどういうことか」など、観る人それぞれに考える時間だったのでなかったでしょうか。

上映後は、刀川監督と少年問題に取り組んでいる横山巖弁護士との対談。「この映画を撮ろうと思った理由」「『隣る人』の意味とは何か」「この映画を通して何を伝えたいのか」など、刀川監督の体験を踏まえた話に参加者は聴き入っていました。対談は「『隣る人』とは、人が生きていく上でなくてはならない存在。この存在は、今日問題となっていないじめや少年非行問題を解決する糸口にもなるのではないか」というところまで展開しました。

対談終了後は、参加者との意見交換の時間。刀川監督の熱の入った回答に一同聴き入っていました。

その後、世話人の米沢慧さんから、今年1月に岩波書店から刊行された高草木光一著『岡村昭彦と死の思想』の紹介と7月開催予定の静岡県立大学での夏季ゼミの案内があり、閉会挨拶の戸田昌子さんは、3月16日からイギリス、バービカンアートギャラリー（ロンドン）で開催中の岡村昭彦の写真（23点）の展示の様子を、スライドを交えて報告されました。

第2部懇親会は、近くのコーヒーマウスキッチン 新大阪店に会場を移し28名の参加で開かれました。乾杯の発声は豊橋医療センター統括診療部長・緩和ケア部長佐藤健さん。佐藤さんは「『隣る人』のただ側にいるだけでいいという考えは、ホスピスの現場でも大事なことであり、いろいろと考えさせられた」と語り、懇親会に入りました。

約3時間、質疑応答の時間が少なかった分、大いに語り合っている様子で、あちらこちらで楽しい会話が續いていました。最後は刀川監督の一言でお開きとなり、関西で2度目の開催となったAKIHIKOの会は関西在住の方々のご協力で無事終了。上映会とトークイベントの参加者は68名でした。

『隣る人』を巡って

トークイベント

刀川和也監督 VS 横山巖弁護士



横山 今日是对談というより、刀川さんが映画『隣る人』をどのような思いで撮影されたのかということをお聞きするよ
うな形で進めたいと思っています。

それでははじめに、私の方から今回の企画についてお話をさせていただきます。

今回でAKIHIKOの会は三十一回目になります。関西での開催は六年前、第二五回の滋賀県大津市以来、二回目です。

今回の企画は、私が以前『隣る人』を観て、その後で刀川さんとお話して感銘を受けたことがきっかけです。

岡村さんは「人はどこから来て、どこに行くのか」という大きなテーマを抱えて世界中を飛び回っていた人だと、私は認識しております。

岡村さんは、広く世界中で活躍すると同時に、日本に戻って来ると、お母さん方との勉強会や看護師さん達との勉強会を開いていました。私自身は、直接岡村さんとは面識がないのですけれども、日本での活動を見てみると、子どもに対する視線を大切にしていた人だったのではないかと思っています。

先日、静岡県立大学附属図書館岡村昭彦文庫に久々に行きました。そこで比留間洋一さんの案内で岡村さんの蔵書を見ているとき、現在は発行されていませんが『高一コース』とか『高二コース』とか、高校生向けの雑誌に、岡村さんがいろいろとご自

身の体験を交えたアドバイを書いていました。世界中を見てきて、現場をよく知る岡村さんが具体的なメッセージを高校生に残していらつしやいます。

岡村さんはいつも子どもたちのことを頭の片隅におきながら活動していたのだと思います。これから子どもたちが幸せに生きていくためにはどうしたらいいのか、大人たちは何をしなければいけないのかということを常に問いかけていたんじゃないかなと思っています。

いま子どもたちのおかれている現状は、いじめ、虐待、貧困など厳しい状況です。そのような安穩としておられない状況の中で、われわれ大人としてできることはないのか、そこをしっかりと見つめていく機会がほしいなあと常々思っております。

「子どもをキーワードにできないか」と考えていた折に、大阪弁護士会主催の行事で『隣る人』を観て、その後懇親会で刀川さんとお話しました。その中で刀川さんの生きざまや姿勢に共感し、岡村さんの視点とも重なるところがあると思ひ、今回の企画となった次第です。

今日は「隣る人」がキーワードになるのではないのかなと思います。前置きが長く

なりましたけれども、それでは進めて参ります。では刀川さん、簡単に結構ですので自己紹介から始めていただけですか。

刀川 いま観ていただきました映画『隣人』の監督の刀川和也といえます。今日は、お招きをいただきまして有難うございます。

この映画は私が初めて作った映画です。私はアジアプレス・インターナショナルというフリーランス・ジャーナリストのグループに所属していて、岡村さんが初期の頃にやっていたように戦争の現場で取材して、テレビや雑誌といった媒体を通して報道するという仕事が出発点でした。

私はいま四九歳で、今年五〇歳になるんですけど、ジャーナリズムに関わるようになったのは三〇歳過ぎてからです。

世の中も華やいていたバブル期に大学を卒業した後、演劇をやったりしてバイトしながら転々としてきました。この映画を撮る前は、フリーのジャーナリストとして、フィリピンとか、「九・一一」後にアメリカが空爆を始めた頃のアフガニスタンにも行きました。その後、この映画の舞台となる埼玉県加須市の「光の子どもの家」と出会い、撮り始めることになったのです。

結果的に八年という時間がかかったので

すが、延べ六〇〇時間ぐらい撮りました。それを八五分にまとめたものをいま観てもらったわけです。

横山 海外に行き、戦闘地域にも行かれて、そこでも多くの子どもたちとの出会いがあったと思うんですが、その中で、刀川さんが子どもについて感じられたことはどういうことですか。

刀川 海外に行くきっかけは演劇活動を通してなんです。京都に学生として、また仕事で来ているフィリピン人と出会い、フィリピンという国に興味をもつようになったんです。

フィリピンに行つて最初に出会った子どもが「ジャパゆきさん」といわれる女性の子どもでした。街を歩いていると子どもが花を売っていました。奥のほうからお母さんが出てきて日本語を上手に喋るんです。そんな出会いがあつて、かれらとしばらく関わるようになったんです。

横山 昔から子どもに対する意識というのは刀川さんの中にあつたんですか。

刀川 無意識にも子どもたちに目がいつてしまふと言いましたよか：「九・一一」後のアフガニスタンでは、当時「誤爆」とアメリカは言っていました。空爆による被

害者たちを取材していました。その取材中でも、過酷な環境の中で遅しく働いている子どもたちのことに、つい目がいつてしまふのです。

フィリピンで取材したのは、児童労働といわれる現場です。ゴミを拾うスカベンジャーといわれる子どもたちのことです。ゴミの中から金目になるものを集めて換金して家計を支えている子どもたちです。

アフガニスタンでも当たり前のように子どもたちが働いていました。大人に頭をポンポン叩かれながら働いている子どもを見かけました。

横山 戦闘地の子どものどういうところに興味を持って追いかけてこられたのですか。

刀川 テーマをもつてとか、意識して子どものことだけを考えていたわけじゃないんです。つい子どものほうに目が向いていったということなんです。

横山 戦闘地などの悲惨な状況のなかで、子どもたちから元気というか、何か希望みたいなものを見出すことはありませんでしたか。

刀川 希望：というより、過酷な状況でした。日本の子どもたちが置かれている貧



困とは単純には比べることはできません。ストリートで生きている子どもたちが東南アジアにはたくさんいます。日本にも困窮する子どもたちがいることは間違いありませんが、見えにくいし、レベルが違います。アフガニスタンでは生活環境がもっと過酷です。「九・一一」以前から二〇年以上もの間、戦争状態が続いていたんですから。

横山　そこで触発されたことが日本の児童

養護施設の取材につながるんですか。そのあたりをもう少し詳しくお話しただけませんか。

刀川　私がフィリピンへ行ったり、アフガニスタンへ行ったりしたのは、実は自分を解放するためだったのでは、といまは思っています。唐突なんですけど。当時はそんなこと考えもしませんでした。いまになって思えば、ということですよ。大学へ行って、演劇をやり始めた理由も、いまなら言語化することができるとは思いますが、自分の家族から逃れたいという気持ちがあったのではと思っています。自分が生まれ育った家族とのことが、私にはずっと引つかかっていたんです。フィリピンに一年ほど長期滞在していたことがありますが、私は日本から逃げるようにしてフィリピンへ行っただと、いまは思うんです。

横山　自分が抱えているものから逃れたいという気持ちですか、それはどういうことだったのでしょうか。

刀川　アフガニスタンに行くとき、たまたま一緒にいった東京新聞の記者さんが、戦場に行くジャーナリストたちを撮っていたんですね。あとで彼は『なぜ記者は戦場に行くか』（注、吉岡逸夫 現代人文社・二

〇〇二年）という本とドキュメンタリー映画を発表するのですが、その中に私が登場します。その記者さんに「なぜここに来ているのか」とって聞かれて「興味があつて」みたいに答えていて、別のところでは「自分の家族が怖い」というようなことも話しているんです。

フィリピンやアフガニスタンに行っても、実は最も見つめなきやいけない自分の家族のことがずっとあつたんじゃないかと思うんですね。

横山　それが演劇に夢中になったり、海外へ行ったりする刀川さんの根源的な欲求だったということですか。刀川さんが育った家庭はどういうご家庭だったのですか。

刀川　親に虐待を受けたとか、直接的に私が暴力を受けたということではありません。ただ、家の中には暴力がありました。そこに身を置きながら、私はいつも嫌だなどという思いと、なんでこんな家に生まれたんだって、小学校の中学年、高学年の頃から思ったりすることがありました。

私はいつも「いい子」を演じていたんだと思います。自分でも言うのもおこがましいのですが、成績優秀ないい子を必死で演じながらやり過ごしていました。

大学への入学を期に家から離れて、いろんな人たちとの出会いを通して、いかに狭い世界のなかでしか生きてこなかったかということを痛感したんです。それまでの自分のことがつまらなく思えて、そんな自分のことをぶち壊したくなつたわけです。

若気の至りでもありますが、「大学を辞めたい」とも思いました。一八歳になつて遅咲きの思春期の反抗期到来つて感じですね。

父親に「学校をやめたい」と言うと「勘当する。縁を切る」つて言われたんです。軟弱な私は「それでもいい」とは言えず、ポシャつてしまいました。大学を辞めることもできず、でも、このままじゃだめだなあと思つてやりはじめたのが演劇でした。なんでもよかつたんです、きつと。子どもじみていますけども、それまでの自分を壊したいんですね。でも勇気がない。酒もタバコもやらなかつたのに酒を飲み始めたり、タバコ吸つてみたりとか。そんなことをしたりして…。

横山 いまのお話を聞いていますと、家族の呪縛みたいなものを打ち壊したいという意識が、刀川さんの大きなエネルギーになつていると思えますね。

刀川 その通りだと思います。いまでこそ、そうだったと言えます。「戦場」という現場でも、過酷な状況を目の当たりにしながらも、私は、そのとき、その場において、心からの切実さもリアリティーも感じる事ができなかったのでは、と思うんです。いまはそう思うんです。

その後、悶々としながらアジアプレスから足が遠のいた時期もありました。精神科の病院でアルバイトなんかもしていた時期もあります。看護補助の仕事で、精神科の入院患者さんがそのまま寝たきりになつて亡くなつていく病棟にいました。オムツ交換が私の仕事でした。

二〇〇一年に大阪池田小学校の事件がありましたね。宅間守という男性が小学校に乱入して、子どもと先生たちを殺傷したという事件です。

豊かと言われている日本で起きたこの事件はいったい何なんだろうと衝撃を受けました。のちに犯人の宅間守は父親から虐待を受けていたことがわかります。無差別に殺傷するという自暴自棄な行動。凄惨で決して許されることではないのですが、そこまでのことをやってしまえるのは、いったいどんな精神状態にまで追い込まれていた

のか。無差別に人を殺傷してしまうまでに至る過程、そのことを考えると、人ごととは思えない自分がいました。

この事件をきっかけに、子どもの問題、家族の問題について調べるようになったんです。

横山 そこで、出合ったのが養護施設だったわけですね。養護施設は家庭に何らかの事情があつて親や家族と一緒に生活できない子どもたちが生活するところですが、そこに目が向いたきっかけを教えてくださいませんか。

刀川 子どもの問題を調べていると、以前の会でもお話しされたことのある芹沢俊介さんの『「新しい家族」のつくりかた』(注、晶文社・二〇〇三年)という本と出会いました。その本のあとがきに、芹沢さんが、映画のタイトルでもある「隣る人」という言葉を生み出した「光の子どもの家」の当時は施設長だった菅原哲男さんのことを書いていました。

芹沢さんは、児童養護施設という、決して家族でも家庭でもありえない場で、家庭的な暮らしを実践しようとする「光の子どもの家」の「疑似家族」のような暮らしの営みから、家族、家庭といったことが逆に



見えてくるんではないか、というようにことを述べていました。家族、家庭の中身ってなんなのか。そういったことを芹沢さんは問いかけているように思いました。是非、「光の子どもの家」に行ってみたいと私は思いました。

横山 芹沢さんの言葉があったとしても、意識しないで過ぎて行ってしまいう人もいます。と思いますが、刀川さんのアンテナにヒッ

トしたのはどのあたりですか。

刀川 うーん：理屈ではなく直感的になんです。家族とか、家庭とか、言葉としては当たり前のように使ってしまうんですが、いったい何なんだろうって……。いまでも自分の家族のことを話し出すと混乱してしまいます。家族とはなんなのか、自分のこととしてわかりたいとでもいいでしょうか。

横山 自分探しだったということですね。

刀川 そういうことじゃないですかね：自分探しでしかないかもしれないですね。

横山 興味があったとしても、一年か二年ぐらい撮れば、施設の様子が見えてくると思うんですけど、八年間、六〇〇時間ですか……。なぜそれだけ時間をかけて撮り続けたんですか。

刀川 かかってしまったというのが正直なところですね。テレビ番組だったら、予算があり、放送日が決まっています、そこに向けてやっていくのでしょけれど、フリーですべて自分で決めてやっていますから。

事前に下調べを通常はするのですが、本を読んだだけで、菅原さんに「本、読みました。菅原さんが子どもたちと一緒にやっている、その暮らしを私は撮りたいんです」って手紙を書いたら、菅原さんが「と

りあえず来てみな」という感じで撮影が許されたわけです。撮り出してから、いろんなことを知っていくわけで、知るために、また子どもたちや職員さんたちと関係を作っていくためにもそれぐらいの時間が必要だったのです。

菅原さんは後で「どうせ途中でやめて帰るんだろうって思っていた」とおっしゃっていましたけれど。ただ「子どもたちや職員さんたちから何かクレームがきたらそれは言うから」とだけ言って、あとは私を野放しにしてくれたんです。いま児童養護施設でそんなところは少ないですよ（笑）。

横山 なかなかないでしょうね。最初はどんな雰囲気だったんですか。

刀川 よそ者ですからね。最初に一回だけ夕食の時間に、ひとつの家に菅原さんが付いてきて紹介してくれて、「あとはご自由に」という感じでしたね。食事の時間を撮影するところから始めました。

横山 この映画には説明が一切ありませんね。

刀川 始めからそうしようと考えていたわけではなくて、編集を繰り返して行った果てに説明をすべてなくしました。「光の子どもの家」の些細な日々の暮らしの営みか



「ずっと居なきやいけない」と思った理由は、それまでの撮影期間においても、忸怩たる思いを持った経験が少なからずあったからです。

日々の暮らしの中で子どもはいろんな小さな事件を起こしますよね。たとえば万引きしちゃったとか、子ども同士で喧嘩をしたとか、おねしょしたとか、毎日のように何かが噴出するわけですよ。

そのことに職員さんたちが日常的な関わりを通して、子どもたちに何がしかアプローチしているわけです。たとえば子ども同士が喧嘩したとすると、その後、暮らしの中で職員の方々がどのようにその子どもに関わっていくのかということが撮れなければ、大事なことが抜け落ちてしまうこととなります。

そのことに気づいたのは、お正月休みがあつて年末から年始にかけて一週間ぐらい詰めて「光の子どもの家」に滞在する事ができたときです。一月二十八日、年末押し迫ったときに小学校六年生で入所してくる子がいました。お正月は家族みんなが集まるときで、家族をもっとも意識する時だと思います。

六年生の三学期を前にして、すぐに中学生になるわけですから、きつと切羽詰まった状況にあつたのだと思います。その子がお母さんと一緒にやってきたんです。一泊そのお母さんも泊まっていかれましてけども、翌朝、母子は泣いて別れるんです。そのあとその子は、初めてきた場所であつたく知らない人たちと一緒に年末、正月と暮らし始めるわけですよね。

その子がいじらしいほど必死にその場に

馴染もうとするとところを見せられるわけですよ。共に正月を過ごして、三学期が始まって登校するところまで撮ることができました。

その子の心の微妙な動き。職員の人たちも子どもたちもそうですけど、それぞれが持つ不安や動揺、そんな「手ざわり」としか言いようがない微細な心の動きといった、「光の子どもの家」の暮らしの実践の大事な部分を撮れたような気がしたので。共に生活する、暮らすっていうことの凄さの一端を撮れたと思えました。

だけど、その後三ヵ月程行けなかつたんです。その子はすでに中学生になっていました。小学校最後の三学期をどう過ごしていたのか、中学校入学を迎えるまでの葛藤、それに対して、職員の方々が何をやっていったのかということがすっぽり抜け落ちてしまつたわけです。

横山 それからは長い期間居続けることが多くなってくるんですか。

刀川 そうです。だけど、撮影はそんなに簡単にいかなくって……。週の半分は「光の子どもの家」で過ごすようにしたんですが、これがなかなか大変なことだったんですよ。想像してみてください、自分の家の中でず

つとカメラが回っているということ。生活の中にカメラが頻繁に介入しているわけですから。食事をするところとか、そういう場面はいいかもしれないけど、撮られたくない場面も当然ありますよね。

横山 今回の映画には凄くインパクトのある場面が出てきますね。どうしてこういう場面が撮れたのかなと、私が気になったところをピックアップしますのでお話しいただきたいのですが。

まず印象に残っているのは、担当の職員さんが異動するといって大泣きしている女の子の場面ですけど、あの場面はどんな状況で撮ることができたんでしょうか。

刀川 たまたま居合わせたんです。もちろん職員さんの異動を知っていて、気にしていたから撮れたということがあります。

横山 たまたまうまくいったのかもしれないが、やっぱり関係性がつくられていたことが大きいと思っただけですけれどもね。

刀川 「光の子どもの家」での暮らしの間に入れてもらいながら撮影をしていると、子どもたちにとっても私の存在は日常となっていくます。居て当たり前といひましようか。職員さんも私のことを自然な流れの中で「お客様」扱いをしなくなりました。

そうやって、どの職員さんとも話をたくさんすることができました。

横山 なかでもマリコさんという職員さんとムツミちゃんという子どもの関わりには感動的なことがいっぱいありますね。

誕生会のようにマリコさんがムツミちゃんに「ずっと居るよ」っていうようなことを言いますよね。でも、養護施設であれば「ずっと居る」って言い切れることはできないんじゃないですか。

マリコさんの心の葛藤と現実の仕事として関わっていく限界みたいなところとか、いろんなものがあの場面に現れているなあと私は思ったんですけど、撮っていてどんなふうに感じながらカメラを回していたんですか。

刀川 確かに職員さんたちは自分の思いとして「ずっと一緒にいようね」ってつい言いがちなんだと思います。

「光の子どもの家」の自立進学基金のパンフレットの中に卒園した子どものインタビュー記事が載っているんですが、その子が、職員に絶対に言ってほしくない言葉は「ずっと居るからね」だと述べています。

横山 ずっと居てほしいというのは子どもの願いでしょうね。

刀川 「光の子どもの家」では責任担当制をとっていますが、退職する職員さんもあるし、さまざまな事情で、途中で担当が変わることだってあります。それが施設の限界だといえませんが…。

マリコさんのあのシーンに限って言えば、彼女は一九八五年に短大を卒業してから現在まで、三〇年間働き続けています。ムツミちゃんとマリナちゃんは、入所当初から担当してきました。マリコさんは、よほどのことがない限りこれからも「光の子どもの家」は辞めないと思っています。マリナちゃんやムツミちゃんが卒園したとしても、親子の関係にはなり得ないとしても、暮らしを通して培ってきた、お互いにとつてのかけがえのない関係はこれからもずっと続くのだらうと思います。

横山 幼い時には気づかなくても、いつか自分がなぜ「光の子どもの家」に来なきやいけなかったのかと思うときが来ますね。

刀川 子どもたちにはいづれ真実を伝えなければならぬ時期がくるんだと、菅原さんはそう言っていました。子どもが背負わされた事情はさまざまですが、それをいつか伝えなければいけない。

理由を知っていて児童養護施設にやって



くる子どももいますが、生まれてからすぐに乳児院を経て施設にやってくると、まったく産みの親を知らない子どももいるわけですから、なかには辛い記憶に蓋をして、記憶を消してしまっているという子どももいるようです。

子どもが一〇歳ぐらいになると「なんで私ここにいるの。なんで……」という疑問を持つようになると、菅原さんは言います。そのときが真実を伝える時期だと言うので

す。ムツミちゃんの誕生会のシーンは、実は真実を伝えたすぐ後でもあったんです。

横山 それで、あの「ずっと一緒に居ようね」という言葉が出たんですか。

刀川 マリコさんは、ショックで動揺し、不安でたまらないムツミちゃんを受けとめて、自分の存在をかけて「ずっと一緒に居ようね」って決断して言ったんじゃないでしょうか。働きだしたばかりの職員さんが「ずっと居るからね」というのとは重みが違うと思います。

横山 ムツミちゃんの方から、そのことを求めたことがあったということですか。

刀川 不安で不安でたまらないとき、むっちゃん、日記帳に「マリコさん大好き」「大好き」「大好き」って一杯書いていますよね。

横山 あー、あそこもすごい場面でしたね。

刀川 常に子どもたちは、理由は職員の退職とか様々ですが、担当の保育士さんが替わってしまいかもという不安を持っていきます。マリナちゃんですえそうでした。「マリコさんとは離れないよね。離れたら、わたし、学校に行けなくなっちゃうから」というようなことをマリコさんに訴えていました。子どもたちにはそういう不安はいっ

もあるんです。

ムツミちゃんの誕生会での出来事に話を戻すと、マリコさんだけでなく他の職員の方々も「ムツミちゃんが大変な状態にあるなあ」ということを察していて、みんなの思いがこもった温もりに満ちた誕生会になったんです。マリコさんは、きつといるんな 생각이こみあげてきて、「ずっと一緒に居ようね」と、言葉の重さをわかつたうえで、そう言ったのだと思います。

横山 来たばかりの人が「ずっと居るからね」っていうのとは意味が全然違いますね。ママとしてのマリコさんの「ずっと一緒に居ようね」だったんですね。単なる制度上の繋がりでではなくて、それを超えた繋がりがあるところがすごいなあと、お話しをお伺いして改めて感じました。

刀川 そうですね。

横山 まだまだいっぱいお聞きしたい場面があるんですけども、ちよつと少し先に進ませていただいて。今のところと繋がると思うんですけども、今回『隣の人』という題名をつけた理由ですね。「隣の人」というのは、隣にいる人、寄り添うとか、見守るとかそういうイメージでいいのでしょ

うか。

この「隣る人」という言葉に、それまでの家庭のあり方とか、それを超えていくイメージを私はもったんですけども。この『隣る人』を撮った刀川さんの思いや「隣る人」の意味を改めて教えていただければと思いますが。

刀川 「隣る人」とは、当時「光の子どもの家」の施設長だった菅原哲男さんがつくった言葉です。菅原さんはクリスチャンなので聖書の「隣人」という言葉が先にあったのだと思います。芹沢さんの言葉に置き換えると「受けとめ手」という言い方になると思います。菅原さんは「光の子どもの家」に子どもたちがやってくるときはみんな単独者で、隣りに人が居ないというのです。ネグレクトのような虐待を受けることは、自分の存在を受けとめてもらえた経験がない、それ以上に存在を否定された経験ともいえます。

菅原さんは、自分を受けとめてくれる人が揺るぎなく存在するという経験を通して、その存在を内在化できたら、人はなんとか真っ直ぐに生きてゆけるのでは、と述べています。そういう大人の存在は、人間が最低これだけはないと生きていけないという

ぐらい大切なことだというんです。「隣る人」が必要だと。

横山 それは物理的に誰かが横に居るということではなくて、自分を支えてくれている誰かが存在すること。そういう存在があれば人はまっとうに生きられるということですね。

刀川 そうですね。結局、映画で描いたことは「隣る人」だったわけです。タイトルは、やっぱり『隣る人』しかないだろうということになりました。

横山 私はこの「隣る人」という言葉が、こじれた人間関係の問題を解いていくキーワードになるのかなあと思いつながら、この映画を見させていただきました。

最初に申し上げたように子どもたちが安心・安全に暮らして生きる社会をつくるのが大人の一つの使命だと私は思っています。その中で、いじめの問題とか、貧困の問題とか、少年非行の問題といった、私も弁護士として関わっていることが多いんですけど、その問題を考えていくうえでも、「隣る人」が解決の糸口になると思っただんです。いま子どもたちのおかれている状況を刀川さんはどう見ていらつしやいますか。

刀川 先ほどの佐藤純子さんのお手紙の中

に、知り合いのアパートに住んでいた家族がまわりの大人が気づかない間に子どもだけになっていたというネグレクトの話がありました。そういうことは稀ではないんではないでしょうか。

子どもたちが保護者のもとでは暮らせない環境に置かれたとき、児童相談所を通して子どもたちは、措置というかたちで児童養護施設にやってきました。児童養護施設は最後の抛り所とも言える場所です。その手前というか、複雑で見えにくいんですが、ネグレクトの状態にあつて、食べることもできないというような過酷な状況のなかに生きている子どもたちは少なくないんですね。

横山 貧困問題ですか。

刀川 貧困問題というときに、それは生活が困窮しているということだけではないと思います。

食への飢えということだけではなく、人の温もりといひましようか。でも、人って抑圧もしますから人がいればいいということでもないんですが、子どもたちは自分に思いを寄せてくれる存在を、大人を渴望しているといまの子どもたちと接するなかで感じています。もう飢えて飢えて飢えま



くつているように強く思います。だから暴れもするんだろうって。ネグレクトとか、虐待というのはマイナスの方向性ですよね存在を否定することです。それはとつてもキツイですよ。そういう子どもたちの存在は見えにくいのですが、私たちのまわりに少なからずいるんです。

「隣の人」っていうことを端的にイメージするとき、私は、秋葉原の事件のことも

思い出します。池田小学校の事件と同じように、無差別に人を殺害した事件でした。加藤智大という男性が事件を起こしたのですが、あのような残虐な行為に至るまでに、誰も人の顔が浮かんで来なかったのでは、と思うんです。「これやってしまったらあかんのと違うか」って声が聞こえるとか、「こんなことをしてしまったら、あの人は悲しむかもしれない」とか、脳裏に立ち現われてくる人が誰もいなかったのでは：と想像するんです。

横山 いじめの問題も含めて少年非行は社会の縮図だと言われています。私は弁護士としていじめ問題とか学校問題とかいろいろやっていて、また大津いじめ自死事件の調査委員会の委員長をさせていただいたんですが、それ以降いじめ問題を自分なりに考えていると、少年非行もそうですけれど、子どもたちの自己肯定感、自己有用感が低いのです。自分が周りからよく見られていない、孤立化していると感じていることが多いのではないかと思います。

これは子どもだけじゃなくて、大人の世界でも自己肯定感、自己有用感が低い人が多くなっているんじゃないでしょうか。

いまパワハラ、セクハラ、アカハラ、マ

タハラなど、ハラスメントが社会問題になっていきますけども、これも自己肯定感が低いから、自分より下だと思っている人に対してハラスメントをすることで自分を保とうとしていると思うんです。ハラスメント自体は人を傷つけるのですが、同時に自分自身も傷つけている、自分の価値を貶めているということに気付いていない点が問題だと思うんです。

人との関係性の中で、勝たなきゃいけないとか、損か得かとか、二者択一の価値観に重きを置いていることがあるからなのかなどと思います。また、少年の問題については、いま、少年法の対象年齢を一八歳に引き下げようとの動きがあるのですが、これは社会全体が切り捨て社会に向かおうとしているのではないかと思います。とても危険な状況だと感じています。

そこを解決するために、刀川さんがおっしゃっている、周りに自分を受けとめてくれる人がいる、何かやろうとするとき、顔が浮かんでくるような存在がいるかどうか。これが非常に大きなきっかけになるんじゃないかと思うんです。

そういう意味で、今回の「隣の人」をひとつのキーワードとして、いじめの問題を

考えてみたり、非行の問題を考えてみたり、大人社会のハラスメントの問題を考えてみたりしていくと、なにか違ったかたちで解決の糸口が見えてくるんじゃないのかなと、今日、そのことを刀川さんに伝えたいなと思っただけです。

刀川 自己肯定感は、体験でしか得られないと思います。自分という存在そのものを受けとめてもらえた経験の積み重ねでしか。自分を肯定できるということは他者との関係性の中でしか培えないものではないかと思えます。

それとは逆に、虐待という負の経験を積み重ねていけば、当然、自己肯定感なんか持てないのではないのでしょうか。「どうせオレなんて」という自暴自棄な自己への評価をしていくようになります。だから人を殺めることもできるし、自分を殺すことだってできるようになるのではないかと想像します。

「光の子どもの家」では家庭的な暮らしの実践を通して、「あなたと出会えてよかった」というプラスのアプローチをシャワーのように浴びせていくことを心がけています。言葉だけじゃなくて、共に居る時間の積み重ね、経験の積み重ねとしてです。ノ

ウハウとか特別なものは何もなくて、ただひたすら積み重ねていくなかで培われていくものだと思うんです。

横山 自己肯定感は体験を通してしか培われないという刀川さんの言葉はまさにその通りだと思います。

今回の映画の中でも、日々の暮らしの中で一つ一つ子どもたちが小さな成功体験を積み重ねていっているという感じがしますし、スキンシップの場面が多いですね。

耳かきをしてもらっている場面とか、一緒に歯を磨いたり、抱きしめてもらったり、読み聞かせしてもらったりとか、そういうことは現に家族と一緒に暮らしている人でも出ていないことが多いのではないのでしょうか。あの場面を見ていて、人と人との関わりの温かさをすごく感じました。

最後にいま刀川さんが取り組んでいらっしゃるということについてお話しただきたいと思えます。「光の子どもの家」にはこれからも継続的に関わっていかれるそうですし、大阪では地域のシングルマザーの人たちとの集まりを持っていらっしやるとお伺いしました。地域による子育てとか、地域の人たちが「隣の人」になる可能性とか、そこ

ら辺のところを教えてください。

刀川 私が活動の主体ということではなく、あくまでも活動の撮影をさせてもらっているんです。そのなかで、「光の子どもの家」での撮影時でもそうでしたが、ちよつとしたお手伝いをしたりしながら、子どもたちやおかあさんたちと関わりを持ちながら撮らせてもらっているんです。映画にできるかどうかは、いまのところまったくわかりません。

いま、可能性としてはあるかもしれないと思っただけなのは、「子ども食堂」というコンセプトで全国に広がっている、子どもの居場所づくり。お母さんの居場所もそうだし、そういうものが地域に広がっていくことです。

いま私に関わっている団体の人たちは、試行錯誤を繰り返しながら様々な実践をされています。支援する側と支援される側という関係ではなく「子育てをひとりやるなんて大変」「一緒にやろう」という声掛けをしながら、「仲間づくり」という意識を持ちながら活動されています。

当然、制度としても考えなければならぬ問題ですが、地域で子どもを育てるといふようなことはできないか、社会で子ども



を育てるといふことはどういうことなのか
つていうことを模索し続けながら活動され
ています。だけど、具体的な形は見えない
ですね。実際やり始めると、シングルマザ
ーということだけでなく、両親が揃ってい
ようがいまいが、過酷な環境で生きている
子どもたちもいるし、親と繋がるのは難し
いということだっています。

横山 世の中全体が自己責任、自己責任っ

て、みんな一人で解決しなければならぬ
ようなことになっていきますからね。

刀川 地域というときに、私にもよくわか
らないんです。都市部では人の入れ替わり
も激しいし、バラバラだし、バラバラにさ
れてきたのかもしれないが、いま地域つ
て機能しているのでしょうか。私はいまで
こそ、結婚したということもあり、少しは
地域で暮らしているとも言えるのですが、
長年一人暮らしで、住む場所も転々とし
てきて、隣にどんな人が暮らしているのかさ
え知らないというところは当たり前のように
生きてきました。私はこれまで地域という
ことを意識することなくやってこれたわけ
です。子どもがいれば、そんなわけにもい
かなったでしょうが…。

いま、地域に拠点を置きながら活動され
ている団体と関わりながら考え込んでしま
うことは、確かに、地域に民生委員・児童
委員の方もいらつしやれば、また、子ども
たちが通う学校もあるし、要保護児童対策
地域協議会といった虐待防止のネットワー
クの設定も進んではいますが、有効に機能
しているんだろうかっていうことです。い
まの家族の見えにくい、複雑な家庭環境に
制度がまったく追いついていないと思えて

くるのです。いまの制度においても、人材
が不足していたり、制度の枠からこぼれ落
ちしてしまう子どもたちが数多くいるので
す。そうして、ニュースになるような悲惨
な虐待死事件となって表面化してくるん
だろうと…。

時折、「地域なんてもうないじゃん」っ
て、自分が生きている姿も省みながら、そ
んなことをつぶやきたくなります。

過酷な環境で生きている子どもたちは荒
れます。そうすると、地域の人たちの子ど
もたちへの眼差しもきつくなります。その
中で、子どもたちはさらに荒んでくる。悪
循環ですよ。

子どもだけではなく親も、困窮し追い込
まれて孤立し、厳しい眼差しの中でまわり
に助けを求めることもできず、逆に敵対し
ていく。ほんとに悪循環です。どうしたら
いいんだろうって途方に暮れてしまいます。
自分の問題だと思っんです。ほんとうは
私たち一人ひとりの問題だと思っんです。
そこに立ったときにいろんなことが見えて
くると思います。学校でのいじめで子ども
が自殺するという事件も後を絶ちませんが、
いじめをゼロにするという数値目標だけで
なく、人が死んでしまったということにつ

いて、どれだけ深く話し合えたのかということを考えます。それができない社会、人間関係とは何なんだろうって…。そこは大事なところだと思うんです。

横山 ありがとうございます。私の方の引き出し方が十分じゃなく、まだまだ話し足りないことがあると思いますが、ちょうど九〇分になりましたのでここで対談は終了したいと思います。

横山 引き続き、意見交換ということで、会場の皆さん方から質問とか意見とかいただいて、さらにお話を深めていきたいと思えます。刀川さんにお聞きしたいこともあると思いますし、ご意見がありましたら、ご自由に発言いただきたいと思えます。

会場 吉田と申します。ありがとうございます。二つ質問があります。一つめは先ほども少し出しましたが、いま社会が個人責任論みたいな感じで、たとえば虐待でもそうですし、いろんな問題が、母親だけの問題になっていくように感じます。また家族はこうあるべきであるというような家族幻想みたいな、いい母親像とか、そういう面が社会の中にあるように思います。

今日のお話しの中に家で暮らすのか、養

護施設なのかというような二者択一でなく、地域でというようなことがでてきたのですが、問題の受け皿として地域がどういこうことができるのかということを示していただけたらと思います。

もう一つは、ヘイトスピーチの問題です。セクシャルマイノリティの問題に対して「私には関係ないねん、その人が頑張ったらしいねん」というような言い方を聞くと、人の痛みを感じる力というんですか、そういう力がどうしてこんなにも無くなったのかというのが、私のなかで課題です。そのことでヒントになることがあれば教えていただきたいんです。

刀川 はい。ありがとうございます。最初の質問の地域で何ができるかということですが、それこそ、いま多くの人たちが模索している段階だと思います。そして、喫緊の課題だと思います。

子どもの貧困率が六人に一人という調査結果が発表されて、その後、「子どもの貧困」がニュースでも取り上げられるなか、「子ども食堂」が全国にも広がりを見せていますね。これっていう形はありませんが、それぞれの人たちが、それぞれのやり方で試しているという状況だと思います、答え

ってないんだと思います。地域の特性もあるでしょうし、地域のなかでほんとに求められていることに、ニーズになんとか応えていこうとするなかでしか形は見えてこないのかもしれない。

「光の子どもの家」での経験からも、子育てにはノウハウもマニュアルもないということを感じました。「大事なことは何なのか」と考えてみたときに、試行錯誤を繰り返しやりつづけることができること、そのことがすごいんだなって「光の子どもの家」の営みを通して思ったんです。

二つめの質問ですが：みんなシンドイはずなんです。「みんなじゃない」って言われる方もいらつしやるかもしれません、経済も落ち込み、世界の紛争も絶えませんし、テロの脅威や震災による原発の問題とか：なんかきな臭い雰囲気の中で不安のなかにあって、実はみんなシンドインではないでしょうか。「不安」で「シンドイ」のにシンドイと言えない。「わたしは大丈夫」って思いたいといましようか…。

弱いもの同士で弾き飛ばしあっているところがないでしょうか。それをどうやったらもっと正直に話し合えるんだろうって考えます。



政治の話をするなら、なぜ自民党があれだけ勝つのか、自分たちにマイナスになることが多いはずなのに、なぜ自民党に投票してしまうのか。私は戦争反対ですけども、それを声高に言えばいいほど、人は遠ざかっていくような感じがあるんですよ。

いま、関わっている団体の活動の一環として、ラジオ放送みたいなことをやってみようという話も出ているんです。それは小

さなネットラジオみたいなのですけど、自分の言葉を取り戻すといいましようか。「わたし」の言葉で喋るということ、自分が

生きている姿とかけ離れないために、そこから始めようと。私の個人的な思いでもあります。そんなラジオを一緒に考えたりしています。

今日も家族の問題、虐待の問題とかを、出来るだけ自分のこととしてリアリティーをもつて語りたいと思つて来たんです。

言葉は喋つた瞬間に絡め取られていく。核心が骨抜にされていく感じがするんです。いろんなことを整理できていないという私の問題でもあります。喋り尽くすしかないんですけど、もしかしたらリアリティーのある言葉が見つかるかもしれないと。ヘイトスピーチをする人たちも実はシンドインではないでしょうか。痛みを抱えて生きている人たちではないんでしょうか。なのに、「自分は違うんだ」と思いたいのので、逆に遠ざけてしまおうということがあるのだと思うんです。

痛いことを「痛い」と言い、シンドインとを「シンドイン」と言う。不安を「不安だ」と自分の言葉で喋っていくことで、人と繋がっていくことも出来るかもしれない、次

が見えてくるかもしれないと考えています。

横山 他にどなたかいらつしやいませんか。
会場 はい。岩崎順子と申します。私は「光の子どもの家」の御本『誰がこの子を受けとめるのか』を先に読んでいて、夫が映画を見てよかったと言っていて、たまたま今日映画があるからと誘われて来ました。

御本を読んでいるときも、それからいま映画を見せていただいても、感じるのが職員さんのやっていることが、それこそ子どもに自分の血肉を分けているように感じます。すごいことです。確かにスキップも必要です。しかし若いお嬢さんが自分の子でもないのにあんなに尽くしたら、職員さんたちが傷つくんじゃないかと心配します。もちろん世の中にこんな方達がいることは感動するんですよ。御本を読んでいるときも、実際に映画を見ても感動するんですけど、職員さんたち、大丈夫ですかって聞きたい。

そこで監督さんにお聞きしたいのは職員さんたちが無事にちゃんと生きていらつしやるかしらということですよ（笑）。本当にそれぐらい、すごいことだと思います。心も体も、職員さんたちお元気にしていらつ

しやいますか。

刀川 はい、元気に生きていますよ(笑)。

児童養護施設全般にいうと、職員の方々は三年ぐらいで辞めていくということが多いわけですが、それぐらい過酷な現場なんだと思います。「光の子どもの家」の場合はそれこそ寝食を共に暮らしているということですから、心配にもなりますよね。

責任担当制って映画の中で言っていました、担当の子どもを持つ女性はだいたい五人ぐらいを受け持つんです。男女混合の縦割で、二歳から一八歳まで男の子も女の子も一緒です。職員はみんな自分の部屋を持っていますが、小学生以下であれば子どもたちと一緒に寝るんですね。だから、子どもたちと一緒に暮らしているといつても過言ではないんですね。つけ加えておくと、四週間に六日の休みは保障されています。

私も初めの頃「すごいなー」と思って職員さん全員にインタビューをしたことがあったんです。「結婚はどう考えていますか」とか、訊いてみたりしたんです。その答えは、当然ですけど、それぞれですよ。

たとえば、映画にも登場するマリコさんは、「光の子どもの家」設立当初からいる職員さんのひとりです。なので、三〇年以

上子どもたちと一緒に暮らしてきたことになりました。

マリコさんは、最初は五年ぐらいで辞めるつもりだったと言います。最初に担当した二歳の女の子が「小学校へ上がるぐらいまでは居よう」と。それが、「小学校を卒業するまでは居ようか」って、そんな感じで、ズルズルと現在まで来てしまったというのです。

もう一つの理由として、「光の子どもの家」に様々な事情を抱えてやってくる子どもたちと、自らの意志で選んで働いている自分の絶対的な立場の違いを言っていました。

担当した子どもが問題を起こしたときに、責任をとって辞めようと考えたこともあったらしいのです。だけど、責任をとるということは、「辞める」ことではないと思ひ直したと言っていました。「子どもたちは自らの意志とは関係ないところで措置されて施設にやってくるけど、私は違う」と考えたというのです。つまり、居続けることが責任をとるといふことだと、マリコさんは考えたということでしょう。

ほかの人たちもいろいろです。様々です。辞める人も残る人も、生きている中で、な

にがしかの節目において、人生の選択をした結果だと思えます。

だから、「結婚はしたいとは思わないんですか」という質問は、いまは愚問だったなと思います。

そうは言っても、「光の子どもの家」での仕事は公私混同のような状態でもあるので、なんとも言えない思いも持ちますが、一方で、子どもたちにとってみれば、そこでの生活は私生活なわけです。職員さんたちは、そこでの暮らしを楽しめなかったら働き続けることは難しいかもしれません。

マリコさんの話をもう少しさせていただきます。最初に担当することになった、二歳のときに「光の子どもの家」にやってきた子どもが高校を卒業し、アメリカへ留学したいとなったときに、マリコさんは、その子の大学の学費を出しているんです。いまでは、「光の子どもの家 自立進学基金」というのがあって、そこで返納する必要のない奨学金で進学することもできますが、その当時はそうではありませんでした。

職員が個人として学費を出すのがいいのか悪いのかという議論はあるにしても、生活をともしながら、その時間の積み重ねの中で、「この子の学費を出すのなら私だ

ろう」と「自然な心の動きとして思えた」とマリコさんはいうのです。

親子じゃないけど、他人でもない。その関係を何といたらいいのかわかりませんが、そんな思いを持ってしまおうということがあるんだなっていうことは、私には希望にも思えるんです。

映画の中で、マリナちゃんもムツミちゃんもマリコさんのことをママと呼ぶことがあったでしょう。本当のママじゃないことは、子どもたちが一番わかっています。「マリコさん」と呼ぶときもあるし、実のおかあさんは「おかあさん」と言ったりして、その時々で使い分けています。混乱してしまいうえ、子どもたちは大変だなんて思ったりもしますが、時間をかけながら、子どもたちは自分自身で少しずつ整理していくことになるでしょう。そのためにも、「隣人」が必要なのだと思います。親子ではなくても、なんといいましょうか、：かけがえのない関係：支援する側とされる側という関係でもない、一緒に暮らしてきたからこそ紡がれた、かけがえのない関係にはなれるということ。

言葉にすると、そんなありきたりの言葉になっちゃいますよ。：。

職員の方々はシスターでも聖人でもないんで、当然、思わず怒鳴ってしまうことだってあるんです。また、本気で子どもたちと向き合おうとすれば、心も揺り動かされますし、言葉が荒くなったり、感情的にもなります。傷つけてしまったり、傷つけられたりするわけで、それを暮らしの時間の中で、お互い許しあっていくしかないわけです。

一喜一憂なんです。「これでこの子はなんとかなる。うまくいっている」と思っていたものが転じて、最悪ともいえるようなことが起こったり、逆に、「どうしてこんなことが」と最悪の事態だったものが、その後、思いもしなかったような展開になって、良きことに変わっていくっていうこともあるんです。長く関わっていると、そんなことがわかるようになります。実際にあったことなので、そう実感できるんです。

悩み、考え、手探りに試行錯誤をやり続けるしかない、そのためにも居続けなければならぬ。子どもたちと関わってしまっただけの責任の重さとともに、そのなかでしか味わえない喜びを感じるようになったとき、この仕事の意味がわかってくるというようにな：。

横山 刀川さんの話は一回火がつくと止まらなくなってしまう。まだ質問したい方がいらっしゃれば、二次会の方でお時間がたつぷりあります。そちらでお話をしてください。刀川さん本日はありがとうございました。

刀川 ありがとうございます。



(写真右は、'85神戸ゼミに参加していた鈴木真理さん)

【略歴】

刀川和也(たちかわかずや)

アジアプレス・インターナショナル所属。フリーの映像ジャーナリストとして01年から02年にかけて、アフガニスタン空爆の被害を取材、テレビ等で発表。その後は主に国内及び東南アジアでカメラマン、取材ディレクターとしてテレビドキュメンタリー制作に携わる。フィリピンの児童労働やインドネシアのストリートチルドレン、アフガニスタンの空爆後の子どもたちなどを取材。述べ8年に渡る撮影を経て「隣る人」を完成させた。本作が初監督作品。

横山 巖(よこやま いわお)

61年生まれ。早稲田大学法学部卒。89年裁判官任官。神戸、函館、小倉、千葉、島根県浜田・益田、大阪、山形県鶴岡の各裁判所に勤務。08年3月依願退官。同年6月より弁護士(大阪弁護士会所属)。11年10月からは大阪大学大学院高等司法研究科で非常勤講師として少年法を教える(14年4月より客員教授)。大津市立中学校でのいじめ自死事案について、12年8月から第三者調査委員会委員長を務めた。現在、いじめ予防授業を小学校・中学校・高校で行うと共に、いじめ問題に関する教員研修、保護者への講演などを積極的にしている。

佐藤純子(昭彦長女)さんの挨拶

去年第30回AKIHIKOの会出席時に横山

巖さんより、今回は大阪でとお誘いを受けましたのに、今回参加できず申し訳ありません。

私事ですが、去年は戦後70年、ヴェトナム戦争終結から40年、父昭彦の没後30周年ということ、函館にて「岡村昭彦の写真in函館」ヴェトナム戦争からホスピスまで写真展を開催しました。子供用パンフレット作成時には、教育委員会との間で何回ものやりとりがあり、手直しをしました。教育現場の大変さ、子供達に事実を伝える難しさを痛感しました。

子供達を取り巻く環境はますます複雑になり見えづらくなっていると思います。だいぶ前ですが、知り合いのアパートに住んでいた家族がまわりの大人が気づかない間に子供だけになって(夜に父親がお弁当だけ届けていた)、大家さんが通報、施設に保護されたということがありました。またアルバイトをしていた子供が携帯を持たなくてはならず、虐待を受けていた親からの承諾が必要になり、施設としての対応の限界を痛感したなどの話を聞きました。

今回は刀川和也さんに、私たちが直接訪れることが出来ない海外において、そして日本において、身近にありながら目に触れることがない現実、難しい問題をドキュメントとして問題提起していただきありがとうございます。

池田千鶴子さんには函館においても、ハンディ

キャップの方々やご家族またホスピスでの細やかな活動をいただき感謝しています。

ご存知の方も多いと思いますが、現在、イギリススロンドンのバービカン・アートギャラリーで「ストレンジアンドファミリア」が開催中で、父岡村昭彦の北アイルランドの写真が発表されています。展示期間は'16年3月16日〜6月19日。続いてマシチェスター・アートギャラリーにおいて、同展が'16年11月25日〜'17年5月29日まで開催されます。先日この写真展オープニングに戸田昌子さんが出席して下さいました。開催実現にお力をいただき有難うございました。

父の函館当時は、青函連絡船から、列車での上京、飛行機はプロペラ機の時代でしたが、昨日3月26日に北海道新幹線が開業しました。

時代はどんどん変わっていますが、今少し、ゆっくりとじっくりと考え、周りに心を寄せる時間が必要だと思います。

いつも父の仕事に理解をいただき有難うございます。皆様に寄り添っていただいています。これからもよろしく願っています。

大阪でのAKIHIKOの会、興味深い時間を皆さんと一緒にできず本当に残念です。父に叱られますね。

桜のたよりはまだまだの函館より 佐藤純子

二〇一六年三月吉日

事務局からのお知らせ

1. イギリス(ロンドン)で昭彦の写真展

3月16日より6月19日まで、ロンドン・バービカンアートギャラリーにおいて岡村昭彦が北アイルランドで撮影した写真23点が、イギリスを代表する写真家・マーチン・パーのキュレーションにより、イギリスを撮った外国人写真家としてロバート・フランクやアンリ・カルティエ・ブレッソン、ブルース・ダヴィッドソンなどと共に取り上げられました。会場では岡村の写真を掲載したカタログやポストカードも販売されました。展示会は11月25日(来月)5月29日、マンチエスター市立美術館に巡回予定。展示風景写真は岡村昭彦のホームページからもご覧になれます。

2. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

2015年

- 7 メディカルはこだて第55号 函館ゆかりの国際報道写真家岡村昭彦の写真展「ヴェトナム戦争からホスピスまで」が開催
- 9・7 朝日新聞 道内版「よみがえる時代と戦争」岡村昭彦さん写真展
- 9・9 北海道新聞 「レンズが語る戦争の悲劇」18日から函館で作品展
- 9・15 毎日新聞Webサイト 岡村昭彦氏没後30年「生と死」見つめる視点 函館で写真展
- 9・15 毎日新聞 道内版「生と死」見つめる視点今も 岡村昭彦氏没後30年 函館で写真展
- 9・18 函館新聞 函館ゆかりの報道写真家・故岡村さん
- 9・19 北海道新聞 函館で戦場カメラマン岡村氏展
- 9・21 NHK NEWSweb 岡村昭彦さんの写真展
- 9・25 木犀舎刊「いのちを受けとめるかたち」身寄りになること「いのちを考える、いのちから考えるセミナー」①米沢慧著
- 10 メディカルはこだて 秋号(第56号)「岡村昭彦の写真 in 函館」ヴェトナム戦争からホスピスまで われわれはどんな時代に生きているのか
- 10・23 岩波書店刊「人々の精神史 第4巻 東京オリンピック」吉田敏浩「岡村昭彦 ベトナム戦争を直視して」
- 11 函館十字街だより 第265号(平成27年11月号)「岡村昭彦

氏写真展 盛況にて終了

- 12 春秋社刊『春秋』12月号 比留間洋一「岡村昭彦文庫の射程—市民ホスピス運動のために—」
- 12・17 春秋社刊『市民ホスピスへの道』「いのち」の受けとめ手になること 山崎章郎、二ノ坂保喜、米沢慧

2016年

- 1・27 岩波書店刊「岡村昭彦と死の思想」(いのち)を語り継ぐ場としてのホスピス 高草木光一著
- 3 都市問題 '16年3月 第107巻第3号 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 3・6 京都新聞 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 3・6 The New Yorker 「Great Britain, Strange and Familiar」by Andrew Dickson ロンドン「バービカン」写真展紹介
- 3・5 Evening Standard 「EXHIBITION OF THE WEEK」by Luke. ロンドン「バービカン」写真展紹介
- 3・17 週刊新潮 '16年3月17日号 十行本棚 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 3・20 朝日新聞 読書面高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 3・23 朝日新聞 第2大阪版第31回AKIHIKOの会紹介記事
- 4・10 東京新聞 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 4 滯標刊「日々、フェイスブック」神山睦美著「岡村昭彦とエズラ・パウンド」
- 5 サライ '16年5月号高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 5 三田評論 '16年5月号 No.1200 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
- 5 メディカルはこだて第58号 細野容子「メアリー・エイケンヘッドにホスピスの原点を求めて」
- 5 月刊PEN 5月1日号 ロンドン「バービカン」写真展紹介
- 5 Casa Brutus ロンドン「バービカン」写真展紹介

3. 世話人に新たに二名の医師推薦

この度、AKIHIKOの会世話人に二ノ坂保喜氏と佐藤健氏に加わっていただくことになりました。二ノ坂氏は「いのちのさかクリニック」(福岡市)院長で在宅医としてホスピスに取り組んでおられます。佐藤氏は愛知県豊橋医療センター統括診療部長・緩和ケア部長であり、ホスピス医です。お二人ともAKIHIKOの会で講師をつとめていただいたことがあります。

4. 「夏季ゼミ」(2016)のお知らせ

世話人米沢慧氏主宰による夏季ゼミが、左記の通り静岡県立大学附属図書館岡村昭彦文庫との共催で行われます。

テーマ：岡村昭彦といのちの思想—ホスピス・生命倫理をめぐって—

対談：高草木光一 米沢慧

日時：七月二十三日(土) 14時～16時

会場：静岡県立大学看護学部棟 4階1341教室

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田52-1

参加費：500円(但し学生は無料)。

*終了後の懇親会費は別途5千円・学生3千円

申込先：①静岡県立大学比留間研究室(054426445604)

②米沢慧(yonezawa.zemi@gmail.com)③AKIHIKOの会事務局まで。

私たちはどんな「いのち」の時代をいきているのか—

この問いを手放さなかつた思想家岡村昭彦。その死から三十年余、遺作「ホスピスへの遠い道」に描き込んだ、いのち言説をひらく試み。

関心のある方はどなたでも参加できます。当日の直接参加も歓迎します。

5. 会報や案内等が不要な方

今回、この会報は会のメンバーの他、大阪開催の第31回AKIHIKOの会に出席してくださった方全員にお送りしました。今後案内と会報などが不要の場合は、お手数をおかけしますが「一報ください」。

『岡村昭彦の会 会報』第26号(2016.6.20)

発行 東京都江戸川区西小岩五十一—二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03—3657—8380

口座番号「001700—6—615123」

加入者名「岡村昭彦の会」

*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp